

香川県地理学漫遊

—平成23(2011)年度「地理学研究」の覚え書き—

香川貴志

(京都教育大学)

Extensive Field Trip around Kagawa Prefecture —A Memorandum of Geographical Studies in 2011—

Takashi KAGAWA

2011年11月30日受理

抄録：本論文は、今年度より筆者が担当することになった表題科目について、その実施内容を備忘録としてまとめたものである。これまでの香川(2003、2005、2007、2009、2010、2011)と同様に、授業内容を簡潔に書き残しておくことで、今後同様の授業を設計する際、コース立案や授業実施に向けて多くの示唆を与え得る資料となる。これまでの「地理学特講」と科目名称は異なるが、実施内容にはフィールドにおける観察と討議を重視する点で共通項も多い。今年度は効率的に県域を巡ることが可能な香川県を対象として、エクステンシブ・フィールドトリップを実施した。

キーワード：フィールドトリップ、城下町、門前町、中心商店街、高松、丸亀、琴平、瀬戸大橋

I. 本稿の目的と現地実習地域の選定

本稿の目的は、数回の事前学習とフィールドでの現地行動からなる集中実施科目について、その運営実態を記録することにある。過去に残した記録(香川 2003、2005、2007、2009、2010、2011)と同様、運営にあたって明らかになった反省点を今後の礎にするのがこの記録の意義であり、それが授業内容の改善に大きく貢献してきた。

ところで本授業科目は、奇数年開講(偶数年不開講)であり、前回実施の2009年までは社会科学科の武田一郎教授が担当していた。他方、もう1名の地理学教員である著者が偶数年開講(奇数年不開講)の「地理学特講」を担当してきた。しかし、総合科学課程(ゼロ免コース)の廃止にともなう担当科目の見直しで、著者が「地理学研究」を奇数年、「地理学特講」を偶数年に担当することになった。2011年度は著者が担当する初めての「地理学研究」ということになる。

将来的には「地理学特講」と「地理学研究」の内容に差を設けるつもりであるが、地理学を専門分野にする学生だけでなく、教育職員免許の取得のために受講する学生も珍しくないため、本格的なインテンシブ・フィールドワークは設計と運営が難しく、しばらくは両科目の差異を設けるのが難しいと考えている。しかしながら、地理学的なものの見方や考え方、すなわち地域観察・地域調査・地域分析の方法や注意点は、いかなる場所がフィールドであっても共通する部分が多い。一方、対象地域が異なれば観察される内容も地域固有の問題点も異なるのは自明のことである。こうした地域研究における本質を以てすれば、仮に同一学生が両方の科目を受講したとしても、各々で新しい発見や体験が得られる。

現地実習地域の決定に際して、著者は訪問経験がある場所を選定するように努めている。それは、土地勘の無

い地域を初めて訪問して得られる新鮮さよりも、訪問経験のある場所を再訪して既に得た知識を参加学生に伝えるほうに一層の価値を見出すからである。今回の訪問地点は、京都教育大学藤森学舎の耐震補強工事の関係で、2007（平成19）年度に開設されていた「地域計画論」が集中講義に振り替えられ、この科目の現地実習で香川県を訪問した際、おおむね経験済みである。ただし、それ以降の変化が想定されることに加え、今回に訪問を予定している地点も以前の訪問時とは若干異なっているため、2度の予備調査を実施した。

Ⅱ. 予備登録、受講登録、事前学習会の設定と実施

ここ数年、当授業科目の登録は、シラバス記載事項に従って予備登録を行い、受講希望者が人数超過した場合は上回生を優先するなどの選別の後、教務課に受講許可学生を届け出るという手順を踏んでいる。今回は30人の定員を設定していたが、受講希望者が定員を下回る20名ちょうどとなった。そこで、全員の受講を認め、可能な限り「教員養成セミナー」などの学内諸行事と重複しないように配慮しながら事前学習会を設定した。しかし、第1回事前学習会を5月11日（水）の午後に設定したものの、予備登録者（受講希望者）の約半数が欠席するという前代未聞の事態に直面し、さらに6月8日（水）午後に予定していた第2回事前学習会では数名の出席者しか集まらない状況に至った。そこで急遽、第2回事前学習会は延期し、その時点での予備登録者全員にEメールで参加の意思を問いかけた。その結果、6名の辞退者が出て、最終的な受講生は、5回生1名（女子）、4回生1名（女子）、3回生7名（男子4名、女子3名）、2回生5名（男子2名、女子3名）となった。総勢で男子6名、女子8名であり、現地実習を伴う最近数年の中では最少の受講生数となったが、現地での団体行動のしやすさを考えれば適正規模であると判断できる。

なお、同時開講の大学院「人文地理学特論」の受講希望者はいなかった。これも前例の無いことで、例年であれば学部的事前学習会とは別個に実施している大学院の事前学習での作業が実施できなかった。そのため、事前に受講生に配布して現地に持参させるブックレットは、著者が全て準備する必要に迫られた。時間の制約もあり、ブックレットは平岡昭利編（1999）『中国・四国 地図で読む百年』、国土地理院の1/10,000「高松」。1/25,000「丸亀」と同「善通寺」の一部を主としたものとなったが、このブックレットは何とか次に記す第2回事前学習会で配布することができた。

順延された第2回事前学習会は7月13日（水）の午後3コマを確保して実施した。上記のように受講生が確定していたため、全員を対象にスケジュール確認と調整を行い、全員の参加可能な日時を選んだ。今回は受講希望学生が比較的少なかったので調整も容易であったが、もう少し受講希望学生が多ければ、事前学習会を土曜日や日曜日に開催する必要が出てくるかもしれない。いずれにせよ、学生への諸連絡はPCアドレスへのメール配信では反応が鈍いので、携帯アドレスを把握しておくことが必要だと感じた。数年前まではPCアドレスだけでも十分だったが、これもモバイル依存を反映したものなのであろうか。

第2回事前学習会では、受講希望者各自に現地実習の対象地域に関わる地理学または周辺分野の学術論文を紹介してもらった。その紹介レジュメはA4サイズ1枚の上限を設け、一人当たりの発表時間は10分とした。こうした制限を設けたのは、とくに歴史学を専攻する学生がボリュームのあるレジュメを作成し、発表時には記載内容を棒読みする傾向にあるためである。教育現場に出てからは、限られた時間に多くのことをこなさねばならず、こうした経験は学部在学中にさせておく必要がある。受講希望学生が紹介した論文は、地理学の査読付き学術専門雑誌に掲載されたものから査読の無い雑誌まで多岐に及んだ。今回は近年における経験をベースにしてCiNiiから直接ダウンロードできる論文の紹介を認めなかったため、他大学図書館等からの文献取り寄せも含め、

学生達は貴重な経験を積んだ者もいたと推察する。ただし、香川県内の特定地域を深く研究した香川大学地理学教室発行の「地理学研究」誌を紹介した者はおらず、彼らの文献検索能力には改善の余地のあることが分かる。受講希望学生が紹介した論文を著者のアルファベット順に列挙すると、荒木(2005)、馬場(1997)、橋詰(1998)、神田(1997)、木田(2010)、古賀(1992)、三宅(2009)、宮本(2007)、大平(2009)、新見(2004)、白石(2002)、角谷(2008)、高橋(1993)、内海(1997)、以上の14本である。これらに加え、著者が現地での説明の際に参考資料として活用した文献は、論文末尾の「参考文献」欄にまとめたとおりである。このようにして3コマ分を費やした第2回事前学習会を無事に終えた。この時点で受講希望学生が完全に決まったため、翌週早々に教務課へ受講希望学生を届け出た。こうして受講希望学生は受講学生となった。

第3回事前学習会は、7月27日(水)の午後に1コマを確保して実施した。ここでは、現地での宿舎費、借り上げバス(3日目の宿舎→瀬戸大橋記念館→JR坂出駅)の代金、諸施設への入場料、旅行保険料などに充当する事前集金も行った。集金額は一人当たり22,000円とした。この額は、現地での追加集金を要さないように概算し、その大半は宿舎やバスの確保などを依頼した旅行社に支払い、その残金を以って現地での施設入場費などに充てるものである。結果的には宿舎が3人部屋であった男子学生には一人当たり900円、宿舎が4人部屋であった女子学生には1,900円を返金することができた。旅行保険への加入に際しては、学生の氏名、よみがな、出発日での年齢が必要なので、次年度からはその一層早い把握に努めたい。

Ⅲ. 現地実習の実施

1. 現地実習1日目—8月6日(土)、晴れ、高松市の最高気温 33.2℃(14時)

学生の居住地、現地実習前後の予定がさまざまであるため、前例に従って現地集合とした。集合場所はJR高松駅改札前、集合時刻は11:30とした。これらの情報は、既に第2回事前学習会で伝達済みであり、現地に持参を指示したブックレットにも記載しておいた。集合時間を11:30にしたのは、京都駅から淡路島経由で高松駅に至る高速バスの到着時刻が11:30であるためである。通常では10~15分の早着が多いと聞いていたが、この日は20分近い遅れが生じ、2名の学生が遅刻した。しかし公共交通機関の乱れであるため、遅刻に関しては咎めなかった。高速バスの到着を待つ間、既に集まっていた12名の学生には、日中のエクスカッションに不要な荷物をコインロッカーに預けさせた。ただ空ロッカーが不足し、数名の学生は手荷物預かり所の世話になった。高速バスで遅れてきた学生も荷物は手荷物預かり所に預けさせた。

学生たちが全員揃った段階で、初任者研修の一環として特別参加してくれた附属高等学校の新井教諭を紹介し、すぐに高松駅前再開発事業で完成したサンポート高松に向かった(図1)。途中、駅前案内地図で再開発事業の概要を説明し、サンポート高松の展望台を目指したが、あいにく当日に結婚式と披露宴で最上階の展望台が貸切になっており、仕方なくその下のフロアから南側と西側を展望した。ここでは高松港、商業地域、官庁街の説明をおこなった。

サンポート高松を後にして、駅前の街路を少し歩き、途中から中央通を進んだ。最初から中央通を歩かなかったのは、中小企業オフィスと大企業オフィスの立地場所の差を説明するためである。兵庫町の入り口からアーケード内を東方向にたどり、丸亀町一番街の円形ドームで再開発事業の説明をした。13時前になっていたため、同じ場所での再集合を14:30として昼食解散にした。昼食後の時間は、事前に配布しているブックレットに記載している4課題のうちの一つである課題①「高松のアーケードにおける買回品店と最寄品店の分布の特徴を400字以内で説明せよ」を各自がこなす、すなわち商店街を緻密に観察することを求め

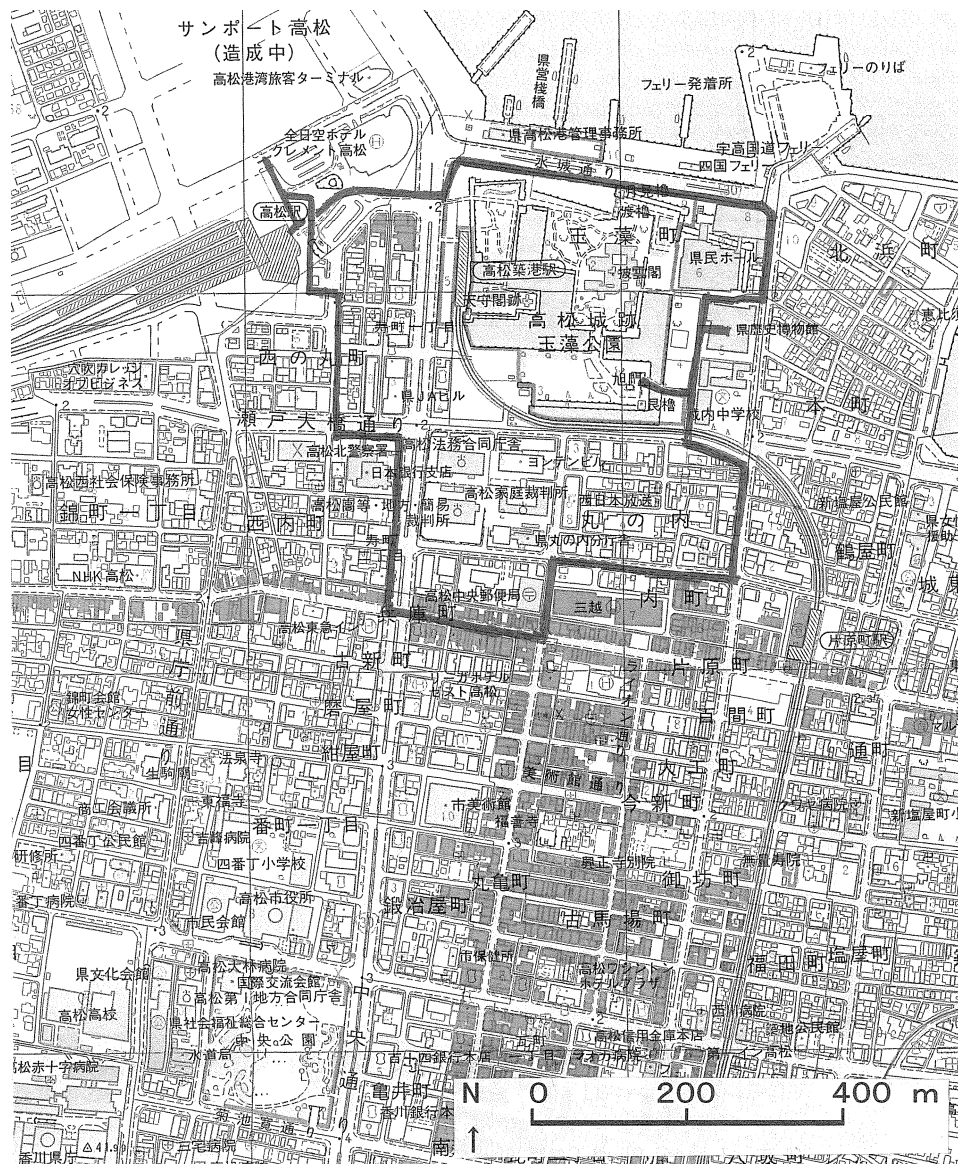


図1 高松における全体行動での移動経路

(1/10,000 地形図「高松」、平成13(2001)年4月1日発行に加筆)

高松駅から反時計回りに巡った。商業地域を東進する経路が北進に変わる交差点が丸亀町一番街の円形ドームにあたる。図郭の南西(左下)隅に香川県庁、そこから約400m北東の位置に高松市役所があり、ともに城郭からは離れている。

た(写真1・写真2)。

円形ドームで再集合の後、高松中央郵便局や三越高松店を眺めつつ歩みを進め、城の近くに官公庁が少ない高松の特徴を実感させながら香川県ミュージアムに至った。高松駅の手荷物預かり所の営業時間が16:30までであったため、玉藻公園(高松城跡)は外から眺めるだけにした。香川県ミュージアムは団体入場券が20名以上であったため、個人券で入館したが、費用は事前集金をまとめた財布から支出した。こうした有料施設に入館する際は、まとめて支払うと効率的で事前集金のメリットが活かされる。香川県ミュージアムには、古代から現代に至るまでの香川県の歴史や文化が効果的に展示されているため、入場ゲート付近で16:10に再集合することを告



写真1 丸亀町一番街の円形ドーム
(2011年8月6日、香川撮影)
中心市街地活性化の先進例として全国的に注目されている。



写真2 リニューアルされた丸亀町商店街
(2011年8月6日、香川撮影)
典型的なアーケードとは一線を画するデザインが魅力を高めている。

げて、各自の関心に応じて自由に見学できるよう配慮した。円形ドームからの移動中、およびミュージアム内の展示の観察によって、ブックレットに記載した課題②「高松と丸亀の城郭と官庁街との位置関係の相違、およびどちらが普遍的な形態かを400字以内で説明せよ」の一部が解決できたはずである。

再集合してから一行は直ぐに高松駅に向かった。手荷物預かり所の営業時間に間に合わせるためであるが、高松駅までの経路は玉藻公園の北側を選び、高松港のフェリー桟橋の説明、景観保全のための電柱地中化などを説明しながら歩いた。ただ、学生たちは涼しい博物館から暑い屋外へ出たためか、少し集中力が欠けているように見えた。

預けていた荷物を高松駅で取り出し、この日から2連泊するホテルがある宇多津までの乗車券を各自で購入した。青春18きっぷで高松まで来た学生もあり、事前集金の財布から支出すると余剰金が生じた場合に計算が複雑になるからである。高松を16:43に発つ快速「サンポート」で宇多津には17:06の定刻に到着した。宇多津駅に到着後、翌朝の列車時刻を再確認の後、駅周辺の市街地がかつて塩田であったこと、塩分を多く含む土壌のため農業的土地利用は不可能であったことなど、事前学習会で紹介された論文を復習しながらの説明をおこなった。区画整理事業による新市街地造成については、宇多津駅から宿舎の「ホテルセントカテリーナ宇多津」に至るまでに適宜説明した（後掲の図2の図郭北東部を参照）。

宿舎に到着してから、部屋割りを調整し、この日の夕食は各自で摂ること、翌日はハードなので十二分に休むように努めること、翌朝は食券を使って各自で朝食の後、9:10にロビーに集合することを告げて解散した。ここ数年の経験から、初日の夜は特段にミーティングをしない方が翌日の行動が円滑に進むことが分かっている。学生たちはおおむね宿舎内や周辺で夕食を済ませたようだが、学生たちの一部は当日に坂出で開催された花火大会の見学に夕食がてら出かけたようである。そのバイタリティに彼らのエネルギーを実感する。

2. 現地実習2日目—8月7日(日)、晴れ、多度津町の最高気温 33.2℃(15時)

節タイトルにある多度津町は、2日目に巡った丸亀と琴平が気象観測点ではないため、両者の中間にある場所として採用した。2日目はホテルロビーに集合の後、宇多津駅まで歩き、6枚つづりの回数券と普通乗車券を組み合わせ、事前集金の財布から支出して隣の丸亀駅までの乗車券を購入した。その時点では、上記の回数券と普通乗車券の組み合わせよりも割引率が高いJR四国の企画乗車券「グループ1日割引券」の存在を知らなかったが、後の丸亀から琴平、そして帰路の琴平から宇多津までは企画乗車券を活用し、普通運賃に対して25%割引で移動することができた。宇多津駅を9:36に発ち丸亀駅には9:40に到着した。丸亀駅到着後、駅前再開発の説明をし、かつて繁栄した富屋町アーケードを抜けて丸亀城の堀端に至った(図2)。この間、閉店した店舗が多いシャッター通りの説明、丸亀の金融街や官庁街の説明をして、丸亀城跡に上った。丸亀港や瀬戸大橋も望め、少し気温は高かったが丸亀の都市構造を把握するには絶好の機会となった(写真3)。前節に記したブックレットの課題②についても、これで解答が導き出せる。上り坂で疲れている学生も散見されたため、天守閣跡に近い木陰やベンチで小休止の後、城を下った。

丸亀城跡からは官庁街を抜け、往路に歩いた富屋町と競うように発展した通町アーケード、旧丸亀港を経て「丸亀うちわの港ミュージア

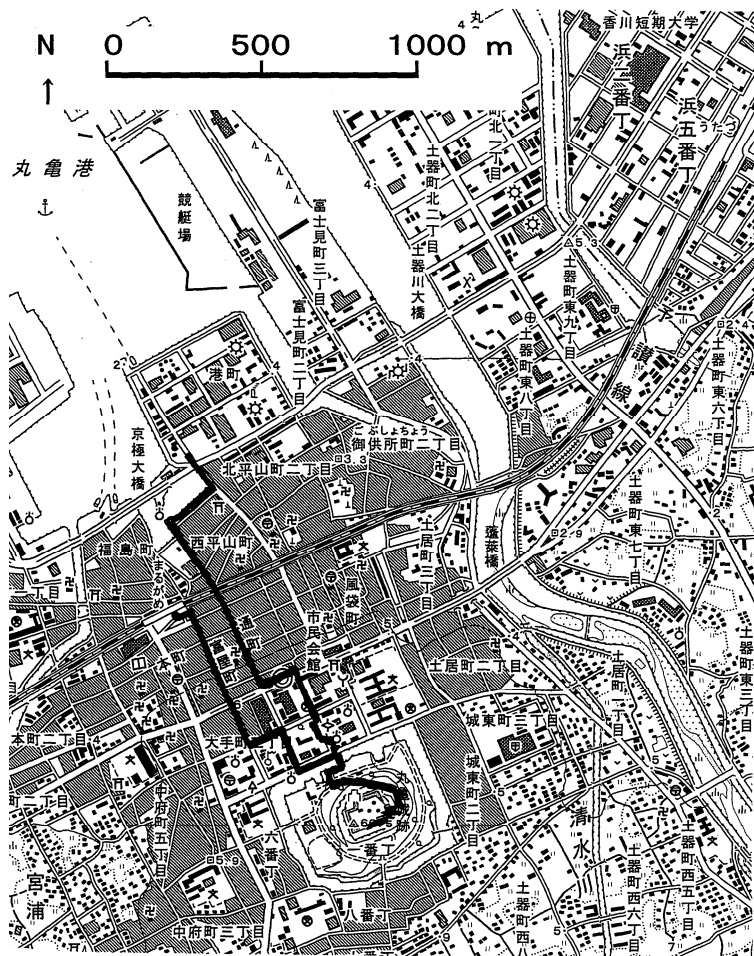


図2 丸亀における全体行動での移動経路

(1/25,000 地形図「丸亀」、平成17(2005)年1月1日発行に加筆)

丸亀駅から丸亀城跡に向かい、丸亀港の京極大橋東詰北側にある「丸亀うちわの港ミュージアム」を見学後に昼食解散し、丸亀駅で再集合した。図郭の北東(右上)隅に宇多津駅がある。そこから約400m 西北西の位置の高層建造物が宿舎にしたホテル。



写真3 丸亀城跡から丸亀港の方向を望む

(2011年8月7日、香川撮影)

かつて丸亀港は金刀比羅宮への玄関口として賑わった。

ム」を訪問した。ここは、うちわの製造工程の説明のほか、うちわの展示即売などもあり、しかも入場無料の施設である。ここは、地場産業として著名な丸亀うちわの歴史と技術を学ぶのに最良の施設の一つである。休憩がてら 40 分ほど時間をとって 12:00 にミュージアムを辞し、昼食を兼ねて 13:15 分に丸亀駅改札前で再集合とした。昼食は手打うどんの他、名物の骨付き鳥を食した学生もいたようである。

丸亀駅は 13:38 に出発し、琴平までの直通列車が無かったため、多度津駅に 13:44 着、同駅を 13:59 に出る列車で琴平駅には 14:12 に到着した。上記の企画乗車券は発券に若干の時間を要するので、帰りの宇多津までの企画乗車券を購入してから門前町に向けて歩き出した (図 3)。途中、琴平のシンボルの一つである大灯籠を眺め、高松琴平電鉄の琴電琴平駅の簡単な説明をして、琴平郵便局前の交差点を通常とは逆方向に右折した。それは、香川県の農業の発展に大きく寄与した香川用水の出口 (琴平トンネル、写真 4) を見るためである。農業用水は小学校社会科で必須となっている稲作学習に関わって各社の教科書や副読本で扱われており、小学校教員を目指す者が多い状況を鑑みてのコース設定である。この用水の開通前では、香川県において渇水が多発したこと、従前は溜池や出水 (湧き水) に依存する農業経営であったことなどを説明した。

香川用水からは一気に金刀比羅宮の参道に向かい、石段を少しずつ上り始めた (写真 5)。午前中、丸亀城跡に上り丸亀市街地を歩いたためか、参道の石段を上る隊列が前後に分散し始めた。中途の店舗が切れるあたりで 3 名が音を上げたため著者も付き添って体力の回復を待った。先頭グループ以下、参道を更に上がる学生については、附属高校の新井教諭に任せる形となった。結果的には、そこから先頭グループに携帯メールで連絡を送り、17:00 に琴平駅の待合室に集合ということとを告げ、本殿まで行くことを諦めた学生 3 名と著者は石段を下りた。今回は酷暑下の夏季でもあり、時間的な制約もあったため奥社まで行った学生はいなかった。琴平で門前町の典型的な形態や人の流れを体験したことで、ブックレットの課題③「琴平の門前町を一層活性化させるための自分のアイデアを 400 字以内で提案せよ」に取り組むことができる。

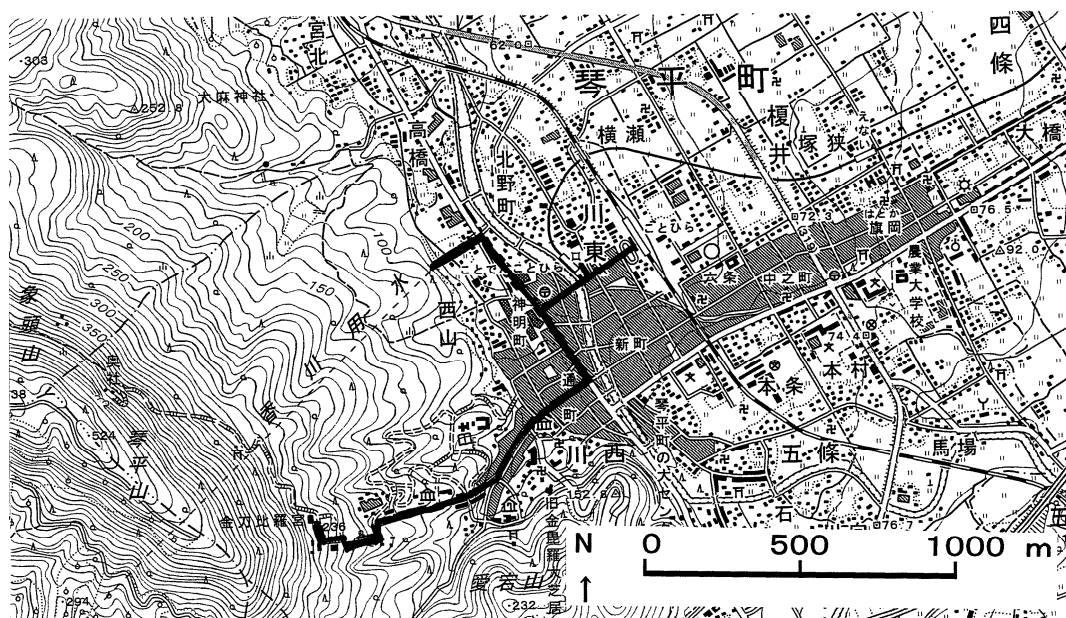


図 3 琴平における全体行動での移動経路

(1/25,000 地形図「善通寺」、平成 18 (2006) 年 10 月 1 日発行に加筆)

琴平駅から西南西に進んだ丁字路を右折し琴平トンネル (香川用水の出口) を訪ね、それから金刀比羅宮に向けて門前町や石段を進んだ。密集市街地の形状から判断して、琴平は参道から東北東に伸びる街路に沿って発達した集落であることが分かる。



写真4 琴平トンネル（香川用水の出口）
（2011年8月7日、香川撮影）

この用水は、出水と溜池に依存していた農業を水不足の恐怖から救った。



写真5 金刀比羅宮に向かう参道の石段と土産物店
（2011年8月7日、香川撮影）

バリアフリーとは程遠い石段は伝統的な信仰の道でもある。

校務のため帰洛を急がねばならなかった附属高校の新井教諭を門前町の途中で見送り、琴平駅で全員が揃ったのを確認してから、琴平駅を17:27に発ち、宇多津駅には17:51に到着した。そこから歩いて宿舎に戻り、恒例のイベントとなった打上げコンパ（反省会を兼ねる）を19:30から始めることを告げて各部屋に分散した。打上げの席上では翌日の行動予定を再確認し、炎天下を歩いた2日間を互いにねぎらいながらの楽しい会となった。

3. 現地実習3日目—8月8日(月)、晴れ、多度津町の11:00の気温29.3℃

最終日のこの日についても、坂出市や宇多津町が気象観測点でないため、解散時刻に近い11:00における多度津町のデータで代用した。瀬戸大橋記念館は南備瀬戸大橋の南詰西側にあるため交通が不便であり、タクシーか借り上げバスの利用が必要である。今回は宿舎をチェックアウトしてから同所を見学し、その後は解散場所であるJR坂出駅まで移動するルートであった。そのため、瀬戸大橋記念館の見学中も不要な荷物を保管しておく場所が必要で、タクシーではなく借り上げバスをチャーターし、その車内で荷物保管を依頼することにした。

宿舎には8:40頃にバスが到着し、8:50にロビー集合を伝達していた学生が少しずつ集まり次第、バスに乗り込むよう指示した。また、事前集金の財布の余剰金を男子学生に900円、女子学生には1,900円ずつ返金した。バスは8:55頃に宿舎を発ち、瀬戸大橋記念館には9:15頃に到着した。バスを降りた地点で瀬戸大橋の架橋について5分程度の説明をおこない、10:15にバスに戻るよう指示した。約50分の時間があれば、記念館の展示物を見て、瀬戸大橋タワーにも上れることは下見の際に確認済みである。

瀬戸大橋タワーは搭乗料金800円を要するが、この日は晴天で瀬戸大橋の展望が良かったこともあり、2～3のグループに分かれてほぼ全員が搭乗したようである（写真6）。バスは10:15に瀬戸大橋記念館を発ち、JR坂出駅には10:30過ぎに到着した。学生全員のバスからの下車と忘れ物が無いかを確認した後、3日間のまとめ、



写真 6 瀬戸大橋タワーから見た南備讃瀬戸大橋（手前）と北備讃瀬戸大橋（奥）

（2011 年 8 月 8 日、香川撮影）

両橋を接続する橋台（ケーソン）は難工事で知られ、技術の粋を集めて完成した。

22 日までに提出してもらったレポートの様式確認をおこなってから解散とした。坂出からの復路は、青春 18 きっぷで帰路する者、高松まで移動して高速バスで京阪神を目指す者、岡山から新幹線で故郷へ急ぐ者、四国に残留してよさこい祭や阿波踊りを楽しむ者など、各自が工夫した行動をとった。

IV. レポート課題の分析—むすびに代えて—

今年度の「地理学研究」において、現地実習に先立って配布したブックレットに記載した課題①～④を改めて整理すると次のとおりである。なお、課題④は全体を通じての記述を求めたもので、本稿では初出である。

- ①高松のアーケードにおける買回品店と最寄品店の分布の特徴を 400 字以内で説明せよ。
- ②高松と丸亀の城郭と官庁街との位置関係の相違、およびどちらが普遍的な形態かを 400 字以内で説明せよ。
- ③琴平の門前町を一層活性化させるための自分なりのアイデアを 400 字以内で提案せよ
- ④今回のエクスカッションで最も印象に残った場所とその理由を 400 字以内で説明せよ。

全ての課題において 400 字の字数制限を設けたのは、冗長な記述を避け、限られたスペースで濃密かつ明快な記述をする訓練のためである。「書いて伝える力」は、教員採用試験などの場で問われる大切なスキルといえる。レポートの締切は、前期の成績評価締切との関係で 8 月 20 日とした。以下では学生達が提出したレポートの内容を分析しながら本稿のむすびに代えたい。

まず、課題①について述べる。買回品と最寄品については、事前学習で説明し、初日に丸亀町一番街の円形ドームで再確認した。模範的な解答例を記すと「人通りが多く中心性が高いと想定されるところほど買回品店の比率が高く、その逆の商業的環境では最寄品店の比率が高くなる」というものである。ごく一部に、具体的な店舗名称を記すなどの冗長な記述も見られたが、大半の学生は正しい観察と理解ができており、「地理学概論」や「小学校教科内容論生活」「小学校教科内容論社会」（以上の 3 科目は全て著者が担当している）での学習が上手く定着していることが確認できた。小中高の全ての校種を通じて、消費にかかわる理解が重要な内容であることを鑑みると、日常生活に密着した商店街の観察を促しておくことは、学生たちが教職に就いたときに大きな糧になる。対象地域によっては商店街の観察が難しいケースもあるが、今後も可能な限りコースに組み込んでいきたい。

次に課題②について記載する。参加した学生には歴史学を専門にする者もあり、城郭は多くの学生が関心を寄せる構造物でもある。この課題の模範解答例は「高松は城郭近くにおいて官庁街の発達が低調であり、丸亀は城郭の近くに官庁が集積する傾向にある。全国的にみれば江戸（東京）や大坂（大阪）に代表されるような丸亀の

表1 課題③の提案、課題④で取り上げられた場所

学生	課題③「琴平門前町の活性化私案」	課題④「最も印象に残った場所(理由)」
5f1	「ゆるキャラ」と「B級グルメ」の導入	うちの港ミュージアム(適切な展示、温かく親切な人々)
4f1	香川県オリジナルスイーツの導入	高松の商店街(卓抜したデザイン)
3m1	街路の活性化、とくにJR琴平駅の周辺	丸亀の商店街(活性化の必要性を強く感じた)
3m2	ウォークラリーや日帰り温泉などのイベント開催	丸亀城(絶景で都市構造を学ぶのに最適)
3m3	休憩ができる和風の低額飲食店の拡充	丸亀(衰退の他方で見られる懸命なまちづくり)
3m4	温泉を前面に出したまちづくり	宇多津の新市街地(自動車社会の縮図を実感)
3f1	ゲーム感覚で楽しめる「お菓子ラリー」	高松の商店街(高級店の多さと人通りの多さ)
3f2	店舗の個性化(スイーツによる「まちづくり」)	金刀比羅宮(上り石段の厳しさと本殿からの絶景)
3f3	JR琴平駅前に博物館や案内パビリオンを設置	金刀比羅宮(本殿からの絶景)
2m1	訪問客増加のためのハードとソフトの取組み	金刀比羅宮(上り石段の厳しさと登った後の充実感)
2m2	各店舗の個性化やカラーの発露	丸亀城(城壁の美しさや城郭跡からの絶景)
2f1	JR琴平駅周辺の道の魅力度アップ	商店街(高松と丸亀の商店街の相違)
2f2	休憩所の増設(休める場所の増設)	丸亀城(建設当時の技術の高さ、城郭跡からの絶景)
2f3	飲食店を上部、土産物店を下部に配置	商店街(高松と丸亀の商店街の相違)

(学生に課したレポートより作成)

【学生の属性の凡例】

1文字目の数字:学年、2文字目のアルファベット:m=男、f=女、3文字目の数字:シリアル番号(学年・性別ごと)

ケースが普遍的・一般的である」というものになる。少し特殊な例として、彦根城や二条城を取り上げて例示した者もいたが、14名中2名の学生が「高松の方が普遍的」と判断したほかは的確な現地観察ができていた。ただ、2名の学生についてもこの誤りだけで成績評価に直結させることはしなかった。高松については県庁や市役所などがある官庁街を歩けなかったが「サンポート高松」からの展望の際に簡単な解説を施しておいたこと、玉藻城(高松城)の周囲を歩けたこと、丸亀は城郭の北部に展開する官庁街を歩き、さらに天守閣跡から市街地を俯瞰できたことなどが総じて奏効したといえる。

続けて課題③について記す。この課題は自由な発想を促すもので、いわば正解の無い問いかけである。昨今の学生たちが意外と苦手な課題形式であるが、回遊性を高めるというオーソドックスなものが認められた一方、ユニークなものも散見された(表1)。その例をいくつか示すと、(ア)ゆるキャラや独自のスイーツの導入、(イ)積極的なイベント開催、(ウ)店舗が途中から無くなり参道の階段を上るのが厳しいので、店舗を増設してスタンプリリーをするなど目標を持って上れるようにする、などである。JR駅前の重点的な整備の必要性を指摘した者も多かったが、大型バスを利用する観光客が多い環境まで考慮した回答は残念ながらみられなかった。

最後に課題④で指摘された場所を集計し、各々についての選定理由を概観する。最も多くの学生から選ばれたのは、各々3人が選んだ丸亀城(表1中の3m2、2m2、2f2)と金刀比羅宮(3f2、3f3、2m1)である。ともに歴史と地理が融合したポイントであり、男女差がなかったことも興味深い。今後ともコース設計において歴史的な場所を取り込んでいくべきだろう。高松の商店街(4f1、3f1)、商店街全般(2f1、2f3)と回答した者が各々2名いたが、全て女子学生による回答である点が面白い。消費活動は男性よりも女性の関心を集めやすいのかもしれない。他の場所については、うちの港ミュージアム、丸亀の商店街、丸亀全般、宇多津の新市街地、これら4箇所が1名ずつの回答を得た。最終日に訪問した瀬戸大橋記念館は見応えのある施設であるが、ここを選んだ者はいなかった。最終日で解散後のことが気になっていたのかもしれないが、徒歩ではなくバスで訪問したため印象が薄かったのかもしれない。コース設計においては公共交通機関や徒歩を積極的に取り入れていくのが賢明かもしれない。

以上に述べたレポート、事前学習での発表、現地での取り組みを総合して成績評価を行った結果、秀(90点)

以上)が2名、優(80~89点)が5名、良(70~79点)が7名、可(60~69点)と不可(59点以下)はともに0名であった。レポート解答(回答)についての解説やコメントは、事前集金に関する会計報告とともに、9月上旬に研究室の掲示板で告示した。

今回は炎天下で急坂や階段を上るなど、フィジカル面で厳しい行程もあったが、コンパクトな地域で多くのものを体験できるフィールドの特徴は上手く活用できたのではないかと考える。ただ、今回のコースは夏季よりも冬季において適切な印象を受けた。前期試験の日程、免許更新講習などの著者の業務との関係で、前期集中科目の現地実習は8月上旬の極めて限定的な日程での開催を余儀なくされるが、対象地域の選定とともに、熱中症対策などに万全の配慮を整えた緻密なコース設計が大切である。今回のように市街地ではアーケードを歩いたり、博物館の見学を中途に挟み込むなども有効な手立てである。下見調査の実施なども含め、今後とも一層の改善を図っていく所存である。

参 考 文 献

- 秋山さやか(2008)「丸亀をあるく—2008年8月5日~10月14日—」、多摩美術大学研究紀要、23、pp.13-19.
- 荒木俊之(2005)「香川県におけるコンビニエンスストアの立地展開」、地理科学、60-1、pp.25-39.
- 馬場 章(1997)「高松における漆器工業の技術と生産構造の変化」、日本歴史、588、pp.81-96.
- 榎並悦子(2001)「in the community まち・もの・がたり まちぐるみのうちわづくり—香川県丸亀市—」、コミュニティケア、3-7、pp.1-6.
- 福川裕一(2009)「中心市街地再生の試み—高松市丸亀町再開発が意味すること—」、季刊まちづくり、23、pp.90-99.
- 橋詰 茂(1998)「戦国期の讃岐」、香川県立文書館紀要、2、pp.23-37.
- 平岡昭利編(1999)『中国・四国 地図で読む百年』、古今書院、181p.
- 稲田道彦・高重 淳・松岡義樹(1989)「金毘羅信仰の変化と琴平町の町並み風景の変化」、地理学研究(香川大学)、38、pp.24-42.
- 稲田道彦・金村のり子・洲崎奈都子・森長将行・横田澄子(1993)「多度津町の町並みの変化」、地理学研究(香川大学)、42、pp.31-48.
- 稲田道彦・田中耕司・三好正治・村川智美・山脇由紀子(1996)「丸亀市の町並みの変化と人々の生活の変化」、地理学研究(香川大学)、45、pp.14-29.
- 香川貴志(2003)「東京を歩く—地下鉄銀座線沿線のフィールドトリップ、平成14(2002)年度『地理学臨地実習』『地域環境学臨地実習』の覚え書き—」、京都教育大学教育実践研究紀要、3、pp.27-38.
- 香川貴志(2005)「道央探訪—平成16(2004)年度『地理学臨地実習』『地域環境学臨地実習』の覚え書き—」、京都教育大学教育実践研究紀要、5、pp.33-43.
- 香川貴志(2007)「長崎ば、さるかんね—平成18(2006)年度『地理学特講(地理学臨地実習)』『地域環境学臨地実習』の覚え書き—」、京都教育大学教育実践研究紀要、7、pp.1-10.
- 香川貴志(2009)「函館・札幌・小樽のエクステンシブ型フィールドトリップ—平成20(2008)年度『地理学特講(地理学臨地実習)』『地域環境学臨地実習』の覚え書き—」、京都教育大学教育実践研究紀要、9、pp.1-10.
- 香川貴志(2010)「歩くぞなもし城下町—松山市街地のフィールドトリップ、平成21(2009)年度『地理学特講(地理学臨地実習)』『地域環境学臨地実習』の覚え書き—」、京都教育大学教育実践研究紀要、10、pp.13-22.

- 香川貴志（2011）「歴史的遺産の『まちづくり』への応用から学ぶ—津和野、萩、石見銀山を巡るフィールドトリップ、平成22(2010)年度『地理学特講（地理学臨地実習）』の覚え書き—」、京都教育大学教育実践研究紀要、11、pp.1-11.
- 神田由築（1997）「讃岐国金毘羅大芝居と門前町」、史学雑誌、106・10、pp.1817-1844.
- 河口栄二（1988）『瀬戸大橋をかけた男』、三省堂、209p.
- 木田 聡（2010）「高松市丸亀町商店街の業種構成の変化」、京都教育大学卒業論文.
- 金 徳謙（2007）「社寺観光琴平町にみる空間構造と観光者の回遊行動」、香川大学経済論叢、80・3、pp.99-120.
- 古賀慎二（1992）「高松市都心部におけるオフィスの立地」、人文地理、44・6、pp.663-688.
- 琴南町教育委員会・満濃町教育委員会・琴平町教育委員会・仲南町教育委員会（2005）「シリーズ市町村合併と教育行政 小規模4町教育委員会の協力体制」、教育委員会月報、674、pp.42-50.
- 港湾協会（2002）「我が町のみなとを再発見『お城』と『うちわ』のあるまち“まるがめ” —金比羅街道への出発点 丸亀港—」、港湾、79・11、pp.44-47.
- 熊 紀三夫（2008）「高松市丸亀町でのまちなか居住の取組み」、住宅、57・11、pp.43-47.
- 三宅耕三・佃 昌道・武林正樹・上戸文洋・高塚順子（2009）「香川県在住の学生からみた観光と麺の関連性について」、うどん道、6、pp.70-74.
- 宮本隆史（2007）「地域の更なる発展のために—歴史は繰り返される～飛躍する宇多津へ—」、調査月報、243、pp.2-10.
- 大平晃久（2009）「戦前期の郊外住宅地開発と近代化—高松市郊外の挿頭丘住宅地を事例として—」、地域と環境、8・9、pp.363-376.
- 佐川昌司（2009）「高松市街地における交通ICカードと中心市街地活性化との連携」、都市計画、58・5、pp.48-52.
- 西郷真理子（2009）「高松市丸亀町再開発の目的と手法」、再開発研究、25、pp.55-62.
- 坂口良昭・近藤明子・鈴木康子・松井真紀（1989）「琴平町の観光地理」、地理学研究（香川大学）、38、pp.10-23.
- 坂口良昭・宮武敦子・藤井敬子・大林直子（1991）「高松市香西地区の都市化にかかわる諸問題について」、地理学研究（香川大学）、40、pp.14-37.
- 坂口良昭・阿曾光司・山本育代（1993）「多度津町における宿泊業と少林寺拳法について」、地理学研究（香川大学）、42、pp.13-21.
- 坂口良昭・坂本清香・原田美紀（1993）「多度津町の工業」、地理学研究（香川大学）、42、pp.22-30.
- 新見 治・川田知子・田中有紀・真鍋和輝（1989）「琴平町周辺地域の出水と土地利用」、地理学研究（香川大学）、38、pp.1-9.
- 新見 治・片山和正・吉野恵美・（1993）「丸亀平野西部地域の河川環境と感慨システム」、地理学研究（香川大学）、42、pp.1-12.
- 新見 治（2004）「持続可能な水利用と水利社会の再構築—讃岐平野の事例—」、日本水文科学会誌、31・4、pp.91-102.
- 白石善春（2002）「松山市・高松市の中心部における高層建築物の立地特性」、瀬戸内地理、11、pp.56-66.
- 角谷嘉則（2008）「商店街のライフサイクルにおける多様な主体の活動と変化のきっかけ—高松市、高知市、新庄市取り組みを事例として—」、政策科学、15、pp.111-125.
- 平 篤志・宗定雅之・安富由賀里・守屋愛子・川根祥子（1996）「丸亀市における人口構造と社会組織」、地理学

研究（香川大学）、45、pp.1-13.

高橋 学（1993）「臨海平野における自然環境・土地利用・開発史—丸亀平野を事例として—」、立命館地理学、5、pp.107-113.

田中敏行（2011）「地方都市の中心商店街における再開発事業の成立過程と課題について—高松市丸亀町商店街G街区第一種市街地再開発事業をもとにした考察—」、再開発研究、27、pp.43-51.

内海明人（1997）「香川県新宇多津都市における土地利用について」、香川県自然科学館研究報告、19、pp.47-54.